

一般質問の要旨 （令和4年12月）
質問者 議席番号 4番 守岡 等 議員

1 知的障がい者や自閉症の方々に対する選挙の投票支援について

知的障がい者や自閉症の方は、今まで一度も投票したことがないという方がほとんどです。その要因として、なれない場所に行くことに大きな不安を感じる、言葉でのコミュニケーションが難しい、政策を言葉で理解することが困難といったことがあげられますが、何よりも社会の中で障がい者が政治に参加すること、選挙を通じて意思決定することの大切さについて理解が不足していたことが大きかったと考えられます。

こうした中で、2022（令和4）年5月25日に、「障害者情報アクセシビリティ・コミュニケーション施策推進法」が公布・施行されました。この法律は、すべての障がい者が、あらゆる分野の活動に参加するためには、情報の十分な取得利用や円滑な意思疎通が極めて重要であることから、障がい者による情報の取得利用・意思疎通に係る施策を総合的に推進し、共生社会の実現に資することを目的に制定されたものです。

知的障がい者や自閉症の方の多くは、社会の中にある様々な障壁から、選挙に関する情報を受け取ることや、投票を行うことが困難な状況におかれています。いま、この法の精神にもとづいて、投票を疎外する障壁をなくし、一人ひとりが自分の大切な一票について考え、声を上げていくことが障がい者だけでなくすべての人が普遍的な価値として尊重されるやさしい社会につながると考え、問題提起するものです。

（1）選挙に参加しやすい環境づくりを補助する「やさしい投票ガイド」の作成

ヘラルボニーという知的障がいのある人たちの可能性を信じて様々な事業を行う会社があります。知的障がいのある人の無限の可能性を見出して、福祉サービスの企画・立案、アーティストの育成など「異彩を、放て」をミッションに掲げる会社です。この会社が中心になって「やさしい投票ガイド」が作成されました。このガイドには投票に行く前に知っておいた方がいいことが次のような6つの項目にまとめられています。第1は「投票のしかたがわからなくてもOK」。どうやって投票すればいいか係の人が教えてくれます。第2は「字を書けなくてもOK」。あなたが投票したい人や政党の名前などを言ったり指さしたりすれば、係の人が代わりに書いてくれます。第3は「字を読めなくてもOK」。あなたが投票したい人や政党の名前などを係の人が代わりに読んでくれます。第4に「メモを持っていてもOK」。投票したい人や政党の名前などのメモを投票所に持っていても大丈夫。メモは自分で書いてもいいし、誰かに書いてもらってもいいのです。

第5は「『選挙公報』を持っていてもOK」。「選挙公報」は、自宅などに届きます。「選挙公報」には、選挙に出ている人のことが書かれています。あなたが投票したい人の部分を切り抜いて持っていくとよいでしょう。そのほか、選挙に出ている人のことが書かれたチラシや名刺、新聞を持っていても大丈夫。ただし、ちゃんと持って帰りましょう。第6が「投票するときは、家族などと離れることも」。投票するときは家族や支援者などとは離れて、自分だけで投票します。係の人に手伝ってもらう場合は、投票所の係が2人、付き添います。投票所によっては、投票するときに近くに家族や支援者がいてもいいと言われることもあります。心配な人は投票に行

く前に選挙管理委員会に電話などで聞いてみましょう。

こうした「やさしい投票ガイド」について、ヘラルボニーの呼びかけに応じて、岩手日報は2022（令和4）年7月の参議院選挙にあわせ朝刊別刷り（4ページ）で発行したほか、特設ウェブサイトで無料でダウンロードできるようにしました。

本市においてもこうした取組に学び、「やさしい投票ガイド」を作成し、知的障がい者や自閉症の方々が選挙に参加しやすい環境づくりを行うことを提案します。選挙管理委員会委員長の御所見をお示しください。

（2）投票所で意思疎通を図る「視覚支援カード」の活用

知的障がい者や自閉症の方々は話すのが苦手な人、コミュニケーションを図ることに困難を抱える方がいます。せっかく投票できることを「やさしい投票ガイド」で知り、投票所に向いても、どうしたらいいのか困ってしまいます。そんな時に役立つのが「視覚支援カード」です。ヘラルボニーが作成した視覚支援カードには①投票所入場券がありません、②家族・支援者を呼んでください、③わかりやすく説明してください、④書き間違えました、⑤代わりに書いてください、⑥トイレはどこですか？⑦代わりに読んでください、⑧出口はどこですか？といった事柄が視覚でも理解できるイラスト付になっており、当てはまる事項を指さすことによって係員との意思疎通を図ることができます。

このような支援ツールを活用することによって、これまでは到底不可能と思われてきた知的障がい者や自閉症の方々の投票が可能になりました。本市においても、知的障がい者や自閉症の方々が「視覚支援カード」を活用し、意思疎通が図れるようにすることを提案します。選挙管理委員会委員長の御所見をお示しください。

（3）知的障がい者施設における「模擬投票」の実施

知的障がい者や自閉症の方は、慣れない場所に行きたがらないという問題があります。自分のスケジュール行動に外れるものについては大きな不安を抱えるようです。こうした問題をクリアするために模擬投票が非常に効果的です。模擬投票を経験することによって、いつものスケジュール行動の一環として投票が位置づけられるような環境整備が必要です。

すでに養護学校等において模擬投票の実践が行われ、障がい者の投票参加の成果をあげているようですが、知的障がい者施設等においても「模擬投票」を実施し、知的障がい者や自閉症の方々が投票できるような環境整備を図ることを提案します。選挙管理委員会委員長の御所見をお示しください。

2 子どもたちの読解力・思考力向上の取組について

子どもたちの不登校が増えている問題については、この間一貫して一般質問でも取り上げ、最近では市内にフリースクールが開設されるなど、一定の展望が生まれています。不登校の子どもたちの安心できる居場所となることを願ってやみません。

一方、なぜこんなに不登校の子どもたちが増えるのかという問題については今後も考えていかなければならない課題です。そのひとつの解決のヒントとなるのが、今回取り上げる読解力・思

考力低下の問題です。

文部科学省の「令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」において、不登校の要因として無気力・不安が46.9%であり、「どのようなことがあれば休まなかったか」という問に対し、小学生の55.7%、中学生の56.8%が「特になし」と答えています。自分がどうしてほしかったのか、どうすれば現状を変えることができるのかを言語化できない状況を明らかにしています。

不登校のみならず、いじめや非行など、今日の子どもをめぐる様々な問題の背景に、こうした国語力の低下があることを石井光太氏のルポルタージュ『誰が国語力を殺すのか』が示しています。

このルポルタージュの最初に、非常にショッキングな『ごんぎつね』の読めない小学生たちの話が掲載されています。新美南吉の『ごんぎつね』の話は国語や英語の教科書・教材にも載っており、多くの人の記憶に残っている物語ではないでしょうか。物語の最初は、ごんのいたずらで逃がしたウナギが実は兵十の病気の母親のためのものだったことを知ったごんが反省し、償いとして栗や松茸を届けるといものですが、この母親の葬儀の場面に関する授業での出来事が紹介されています。<よそいきの着物を着て、腰に手ぬぐいを下げたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きななべの中では、何かぐずぐずにえていました>の部分で、常識的に読めば、参列者にふるまう食事を用意している場面であり、教師はそうした答えを期待して班ごとに話し合わせたのですが、生徒の間からは耳を疑うような発言が飛び出していきます。「この場面は、死んだお母さんをお鍋に入れて消毒している所だと思います」「私たちの班の意見は違います。もう死んでいるお母さんを消毒しても意味がないです。それより、昔はお墓がなかったので、死んだ人は燃やす代わりにお湯で煮て骨にしていたんだと思います」「煮て骨にして土に埋めたんだと思います」などなど。けっしてふざけているのではなく、このクラスの8つの班のうち5つの班が「死体を煮る」と答えたそうです。

この話が象徴するように、いま多くの子どもたちの国語力が低下しており、常識的な想像力・思考力が不足している問題が指摘されています。やばい、えぐい、うざいといった短絡的な言葉が多く、「死ね」という言葉も簡単に使います。こうした言葉のない子どもたちは、うまくいかなかった時に、なぜそうなったのか言語で考えることなしに、場当たりの解決、すなわち暴力や不登校、ネットでの悪口、リストカットなどに走ってしまいます。自分の言葉で考える、想像する、表現するといったことが苦手なために、様々な誤解が生じたり、生きづらさにつながったり、トラブルになってしまうということです。

不登校の子どもたちや様々な事件を起こした子どもたちにその原因を聞いても「わからない」と答える子どもたちが多いのは、こうしたことに起因していると思われます。

こうした子どもたちの国語力、思考力低下の背景には、スマートフォンなどデジタルツールが生活に入り込んだことでリアルな会話が減ったことや、何よりも家庭環境が大きく影響していることがあげられます。

SNS上では様々な差別用語が交わされています。社会的な規制や教育が追いつかないまま子どもたちは異常な言語環境の下にさらされています。

また、家庭の問題でも、デジタルツールの発達で、スマートフォンやタブレットを見せるだけ

の育児（スマホ育児）が増えています。長時間勤務を終え、親が夜に帰宅した後もゲームやスマホをいじってばかりいて、子どもとじっくり向き合っていないということもあります。

こうした家庭の問題については、フィンランドのネウボラなど国家が家庭の中にまで踏み込み、無償で国語力の底上げを図っている国もあれば、国内でも広島県などが欧米型の子育て支援を取り入れようとしています。

本市でデジタルツールへの対応や、家庭の中まで踏み込む施策については今後の課題になるかと思いますが、学校教育を通して国語力・思考力を取り戻し、子どもたちが自分の行為について考えを巡らし、反省や自己肯定感を取り戻すことは十分可能だと考えます。こうした問題意識にもとづいて、子どもたちの読解力・思考力向上の取組について提案する次第です。

（１）基礎的読解力を調査するリーディングスキルテスト（RST）の実施

日本の子どもたちの読解力が低下していることは、OECD（経済開発協力機構）が３年ごとに実施している学習到達度調査（PISA）が明確に示しています。２０１８年の調査では、日本の読解力の順位が前回２０１５年の８位（５１６点）から１５位（５０４点）と過去最低になりました。

このことも影響し、新しい学習指導要領では高校で論理国語を導入したり、小中学校でも文学偏重から事実について書かれた文章を正確に読んだり書いたりすることにも重点が置かれるようになりました。国語だけでなく、算数の分野でもドリルは得意でも、文章題は何が問われているのかわからないという子どももいることから、問題を正しく読む読解力の向上が求められています。

いま日本の教育は重大な転換の節目にあると考えますが、必要なことは、子どもたちの基礎的な読解力がどのような水準にあり、どのような対策が必要かということをはっきりとすることです。基礎的読解力の調査に関して、「教育のための科学研究所」がリーディングスキルテスト（RST）を開発し、全国で１００以上の学校や機関が協力し、１４万人以上が受検しています（２０１９年時点）。このテストは「事実について書かれた短文を正確に読むスキル」を次の６分野に分類してテストが設計されています。具体的には

- ①係り受け解析…文の基本構造（主語・述語・目的語など）を把握する力
- ②照応解析…指示代名詞が指すものや、省略された主語や目的語を把握する力
- ③同義分判定…２文の意味が同一であるかどうかを正しく判定する力
- ④推論…小学校６年生までに学校で習う基本的知識と日常生活から得られる常識を動員して文の意味を理解する力
- ⑤イメージ同定…文章を図やグラフと比べて、内容が一致しているかどうかを認識する力
- ⑥具体例同定…辞書（辞書的な定義を用いて新しい語彙とその用法を獲得できる能力）

理数（理数的な定義を理解して、その用法を獲得できる能力）

といったもので、約３５分間で６分野７項目にわたって出題されます。

実際には次のような問題があります。

Alex は男性にも女性にも使われる名前ですが、女性の名 Alexandra の愛称であるが、男性の名 Alexander の愛称でもある。

この文脈において、以下の文中の空欄にあてはまる最も適当なものを選択肢のうちから1つ選びなさい。

Alexandra の愛称は () である。

①Alex ②Alexander ③男性 ④女性

正解は①の Alex ですが、この問題における中学生の正答率はわずか37.9%、高校生は64.6%だったそうです。

このようにじっくりと読めば理解できるはずのものが読めていないことから、リーディングスキルテスト (RST) はこういう子どもたちを早期に発見し、教科書を読めるようになることを目標にして指導計画を立てるということです。一人ひとりの生徒の読解力を把握するとともに、教師自らがリーディングスキルテスト (RST) を受検し、「なぜ生徒が躓くのか」「どうすれば読めるようになるのか」を PTA や学校、教育委員会全体で考えたときに初めて効果が出るということです。

埼玉県戸田市、東京板橋区、富山県館山町では全数調査を実施し、教員にも受検させています。福島県は小学6年生から高校生まで6000人規模の調査を実施し、奥羽大学と協力して分析に当たっています。

埼玉県の学力学習状況調査において、戸田市はそれまで県全体の中位だったものが、リーディングスキルテスト (RST) を実施した後は突如として中学校は1位、小学校は2位となり、総合1位に急上昇しました。読解力の向上が確かな学力の基礎となることを実証したのではないかと考えられます。

子どもたちの読解力・思考力向上の取組として、基礎的読解力を調査するリーディングスキルテスト (RST) の実施を提案します。教育長のご所見をお示しくください。

(2) 思考力向上に向けた具体的取組

思考力を向上させる取組としては、興味のあるニュースを選ばせて、ニュースの要約を200字程度、感想を200字程度で書かせる「新聞学習」、主語と述語だけの簡単な構造の文から始めて、修飾語を順に加えていく「言葉遊び」、信頼性、客観性、論理性などを評価しながら読む「批判的読み(クリティカルリーディング)」などが効果的だと言われてはいますが、今回は2つのツールについて提案したいと考えます。

ア 子どもたちの考えたことを可視化することによって思考力を向上させる「思考ツール」の活用

平成29年に公示された学習指導要領では、「考えるための技法」という考えが初めて取り上げられ、「比較する」「分類する」「関連付ける」などの技法が例示されました。また、「学習指導要領解説総合的な学習の時間編」において思考ツールが取り上げられています。この思考ツールは関西大学の黒上晴夫氏によって日本向けに導入されたもので、より多くの子どもたちが自分の考えを表明できるようにすることを目的とするものです。

思考ツールには目的・段階に応じた様々なチャートがありますが、授業に有効なYチャートについて説明します。たとえばバンクシーの絵を見てどう感じるか意見を言いなさいと言われても

なかなか意見を言えない子もいます。その際に Y で区切られた 3 つの部分に色・タッチ・場所が書かれたツールを使用して、色はどんな色か、どんなタッチで描かれているか、この絵が描かれた場所はどんな場所かというヒントを与えることによって、たとえば人物は黒だが周りはきれいな花が咲いている、タッチは柔らかく少しぼやけている、場所は戦場かもしれないというイメージを膨らませ、たとえばこの絵は平和の必要性を訴えているのかもしれないという思考に至る援助を行うものです。

この思考ツールを活用することによって、自分の考えを整理することができるようになり、おとなしかった子どもたちが良くしゃべるようになったという実践例が示されています。また他の子どもたちの思考ツールと比較することによって多面的、多角的な見方ができるようになります。こうした実践を通じて、違う価値観を持つ人の考えにも耳を傾け、どうすれば共生や共存できるのかという視点を持つことにつながるのだといいます。

この思考ツールを導入してめざましい成果を出しているのがつくば市立春日学園義務教育学校です。2012年に複数の教員が研究部を結成して指導案を作成、生徒たちにツールの使い方を教え授業やイベントの時に利用するようにした結果、物事を考える力が飛躍的に伸び、学力が全体的に10ポイント上がっただけでなく、課題だった不登校もゼロにすることができたということです。

子どもたちの考えたことを可視化することによって思考力を向上させる「思考ツール」の活用を提案します。教育長のご所見をお示しください。

イ 多様な意見を積み重ねる「哲学対話」の活用

「哲学対話」とは、答えのない問いに対し、クラスみんなの意見を出し合うというものです。東京・立教小学校では哲学対話のモデル授業を実施したところ、生徒たちの考える力や表現する力が瞬間に向上し、クラスの間関係も良くなっていったことから、本格的に導入を始めました。

哲学対話で行っているのは、最近ブームの「論破」とは真逆なもので、人の話をきちんと聞き入れた上で自分の意見を述べ、さらにいろんな人たちとの対話の中で思考を深めて柔軟に自分の意見を変えていくというものです。まさにヘーゲル哲学の弁証法・アウフヘーベンと言えるものです。哲学対話は週1回の道徳の授業を使って隔週で行われているということです。

この「哲学対話」を通して、生徒たちは自分たちで哲学サークルを作ったり、ディベート同好会結成にもつながったということです。子どもたちは「哲学対話」の成果として、「先入観を払拭できた」、「相手の意見を尊重できるようになると、生きることがすごく楽になるのです」と語っています。

こうした多様な意見を積み重ねることによって思考や人間関係を深めていく「哲学対話」の活用を提案します。教育長のご所見をお示しください。